

こくみん共済 coop 慶應義塾大学寄附講座

「公共私による新しい福祉価値の創造－新しい福祉価値をどのように生み出すか－」

第6回 2025年11月13日

「株式譲渡をめぐる労使協議を終えて ～労働組合の役割～」

株式会社そごう・西武 西武池袋本店 店長 寺岡 泰博氏

■大手百貨店がストライキに至った経緯

今日のテーマは労働組合で、私は今年の4月までそごう・西武労働組合の委員長でした。店長に就任したのは5月1日からです。皆さんのご記憶にあるかわかりませんが、2年前の2023年8月31日に、労働組合がストライキをして池袋駅前を練り歩いた時の先頭にいたのが私です。今日は、その時の労使協議のコアな話をしていきます。少し振り返りをすると、我々の会社そごう・西武はセブン&アイ HD の事業会社の一つで、2023年8月1日に、林拓二社長が解任されたところで労使協議が山場を迎えます。団体交渉を重ねましたが残念ながら折り合うことができず、8月31日にストライキを実施したという流れです。もともと2022年1月31日に、日本経済新聞夕方のデジタル配信で「そごう・西武、売却へ」といった記事が突然出ました。我々従業員には寝耳に水で、会社からそういった話は全く聞いていませんでした。その時点で会社は、そのような事実は何もないとしてコメントを発表しなかったのですが、その2ヶ月後、4月7日に株主に向けて方針をIR上で発表したのです。そこでそごう・西武についてストラテジック・レビューを実施する、つまり事業再編をしていくということがようやく正式に発表されました。事業再編については、セブン&アイ HD はセブン・イレブンが収益の8割くらいを占め、それ以外の会社はスーパーやGMS、専門店などです。その中で、コンビニエンス・ストアと百貨店は事業形態が遠いところにあるため、それについては再編すべきではないかということでした。我々はこれを聞いたときに、労働組合として向き合っていかなければいけないと思いました。

■噛み合わない主張

労働組合として、経営側と話をする必要がありました。しかし難しいのは、そごう・西武は「私たちが主導した案件ではないので、話の詳細もわからなければ、決定権もない」と話を聞こうとしません。案件を主導していたのは親会社のセブン&アイ HD なのですが、セブン&アイ HD は「あなたたちを雇っているのは私たちではなく事業会社なのだからそごう・西武と話をしなさい」と、それぞれが話を聞こうとしない。そこでファンド側（投資会社のフォートレスとヨドバシ HD）にも交渉を呼びかけましたが、「我々は会社を買うと言っているだけで、まだ買ったわけではない。なので、あなた達と話す立場にない」と、こちらも応じてもらえませんでした。加えて、西武池袋本店は駅の中にある池袋東口の象徴ということで、景観が変わるのでは遺憾だと当時の豊島区長が声明を出したのですが、本来は民間企業の一案件ですから賛否ありました。我々の主張は、「事前の情報開示」、「事業の継続」、「雇用の維持」の3つです。株式譲渡自体を反対していたわけではありません。コンビニエンス・ストアを生業とする人たちと百貨店を運営する我々は考え方が違いますから、コンビニに資源を集中したいセブン&アイ HD を離脱することは長期的に考えれば悪いことではないかもしれません。井阪社長に我々の強みを聞いたところ、店舗立地、従業員、優良

顧客、多様な取引先を挙げました。しかし、これらは全て売却が成立したら失うわけです。強みがなくなるのに再成長させるという理屈がわからない。しかも百貨店業界は右肩下がりなのでキラコンテンツを入れる、そのキラコンテンツは家電だというのですが、皆さんご存知の通り、池袋駅周辺の家電は完全に飽和状態です。正直、納得できないことばかりでした。雇用の維持についてもファンドとホールディングスで「トップ同士で約束したから大丈夫」と繰り返すのですが、情報開示がなく、事業計画の提示もなく、受け皿の労働条件も見えず、何を根拠に保障するのか全くわかりません。お互いの主張はすれ違うばかりでした。

■わたしの思い ～労働組合委員長として～

労働組合の委員長であり労働組合の専従者である私の給与は、組合費、つまり組合員の給与から出ていました。組合員の不安を解消するために、私が責任を果たすのは当然です。それから今回のことはそごう・西武だけの話ではありません。百貨店は斜陽産業だといいますが、全ての百貨店が潰れるわけではなく、多くの先輩達が百貨店を守ってきました。日本一の入店客数を誇る店舗を売却する計画も含めその長い歴史に対するリスペクトはあるのだろうか？さらに、もう家電量販店は要らないといったお声もある中で、そのことを無視して“ただ高い値段をつけたところに売る”という行為は、お客さま第一の姿勢や地域のニーズにマッチしているのか？こうしたところに疑問を感じました。その中で、労働組合にとっては雇用の問題は最重要の“一丁目一番地”であり、労働組合は経営へのカウンターパートとして、経営が耳に痛いことほど言わなければいけないと思いました。

■株式譲渡 その後

我々は手を尽くしましたが、それでも株式譲渡自体は残念ながらおこなわれてしまいました。2年前の8月31日にストライキを起こしたのですが、その翌日に株式譲渡が完了したのです。現状は、本館の約1/3が西武池袋本店としての営業フロアで、2/3はヨドバシさん区画になります。また、経営は雇用を守ると言っていましたが、それも私たちが危惧していた通りになりました。西武池袋本店には当時約850名の社員と、その約10倍の人数のお取引先様からの販売員がいましたが、販売員の方々は働く場が無くなり大半が異動や退職となって、社員も850名から半減しました。会社は最低限できることとして転進支援や、セブンイレブン、ファンド側企業への出向という受け皿も用意しましたが、危惧していたことがリアルに起こったのです。

かつて28あった店舗数は10（小型店除く）になり、多くの閉店を繰り返す中で後悔先に立たずということを実感し、判断に迷ったら前に突き進むことが大事だと思っています。労働組合の委員長と言っても一社員であり、一社員が社長に物申すというのは勇気が要ります。しかし、誰かが必ず見ていると信じて、自分に正直に一生懸命に頑張ることが大切です。また、今回のようなことを風化させないことや、家族や仲間を大切にすることも大事です。最後に、会社は誰のものなのか、労働組合は本当に必要なのか、皆さんに改めて考えていただきたいと思います。

<文責：こくみん共済 coop >